

## 異言への釈義的アプローチの試み

——ペンテコステとコリント教会——

伊藤 明 生

### 序

本稿の課題は、新約聖書に登場する「異言」なる現象が如何なるものかを釈義的に解明することにある。ところが、この課題は、非常に困難なものに他ならない。先ず、二千年前の意味を復元するという釈義そのものが決して容易なものとは言えない。その上、新約聖書で「異言」とも訳される *ἑτερογλωσσία* は、本来「舌」を意味し、それから「言語」、「言葉」の意味が導き出されている。そして、新約聖書特有の用例として、「異言」という意味がある<sup>(1)</sup>。従って、どの *ἑτερογλωσσία* を「異言」と訳すかは、文脈により、意見が分かれることもある<sup>(2)</sup>。更に、「異言」という現象を定義しようとする時、その人の様々な背景に影響されて、容易には意見の一致を見ない。

例えば R.A. Harrisville 氏<sup>(3)</sup> (*ἐν ἑτερογλωσσίᾳ λαλεῖν* という句が「異言」を表現していると)、ヘブル語ではラシヨーン・アヘレットが「異言」にあたるとして、「異言」にアプローチしている<sup>(4)</sup>。しかし、同じ、

もしくは同類の表現が用いられているからといって、同じ、もしくは同類の現象に言及されているとは必ずしも限らない。その都度、何らかの吟味が必要である。また、W.G. MacDonaldは、何の根拠も提示しないで、「異言」とは、「神の御霊の力によって、知らない言語を話すこと。」と定義して、新約聖書の「異言」について論じている<sup>(4)</sup>。

有名なパウアーの新約ギリシヤ語辞典では *phōsa* の項目の三番めの意味として、「異言」が挙げられている。*phōsa* の、この用例の起源としては二つの可能性があると指摘しながらも、その意味する現象そのものは明白であるとし、他の宗教での陶酔状態で予言や託宣することと同一視している<sup>(5)</sup>。それとは、対照的に、S.D. Currie は、新約聖書外での *phōsas* *lalein* なる表現を調べ、その意味する現象を的確に定義できないと結論している<sup>(6)</sup>。

以上のように、多種多様な見解を垣間見る時、もはや解明不可能な問題ではないか、との絶望感を覚える。しかし、このような見解の相違の背景には、いくつかの理由を認めることができる。先ず第一に挙げることができるのは、昨今にぎわっているカリスマ運動、「異言」問題との拘りである。現代の問題に対する姿勢に、新約聖書の本文を読み、解釈していく姿勢が、往々にして大きく影響されてしまっている。そのため、本稿では、現代の教会における「異言」とは無関係に、新約聖書の記述と取り組みたいと思う。しかも、「異言」そのものの是非を論じること避けることにする。第二に当然のこととして問題なのは、資料が少ないことである。使徒の働きとコリント人への手紙第Iにしか、新約聖書で「異言」への言及がない。しかも、使徒教父の文書などでも、ほとんど言及されていない。そこで、しばしば異教の予言者達が恍惚状態で託宣を語ることなどが<sup>(7)</sup>類似の現象として扱われることがある。また、旧約聖書で、預言者が恍惚状態で預言すること<sup>(8)</sup>と同一視することもある<sup>(9)</sup>。更には、ローマ人への手紙八・二六やテサロニケ人への手紙第I五・一九等が「異言」現象理解に用いられることもある<sup>(10)</sup>。確かに、類似現

象もしくは、類似しているかもしれない記述と「異言」を比較してみることは有意義であるかもしれないが、「異言」現象そのものが何であるかはつきりしない段階で比較してみても余り意味がないように思われる。むしろ、混乱を招くのではないか。従って、資料が少ないこと自体、問題ではあるが、むしろ、本稿では、使徒の働きとコリント人への手紙第Iでの「異言」への言及に限って論ずることとする<sup>(11)</sup>。それでは先ず、使徒の働き、そしてコリント人への手紙第Iと、順番に当該箇所を見てみる。

## 一、使徒の働きでの「異言」

使徒の働きで、はつきりと「異言」への言及があるのは二箇所である。一〇章で、ユルネリオと彼の親族と親しい友人たちにペテロが福音を語っている時、彼らに聖霊が下り、「異言」を語った(四六節)。また、一九章で、パウロが、ヨハネのバプテスマしか知らない弟子たちに会い、彼らにイエスの御名によってバプテスマを授け、手を置いた時、聖霊が下り、彼らは「異言」を語った(六節)。この二箇所と興味深いことは、「異言」を語ることが単独では記されていないことである。一〇・四六では、「彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。*(ἤκουσαν γὰρ αὐτῶν λαλοῦντων φάσας καὶ ψαλλουσῶν τῷ θεῷ)*」とあり、一九・六では、「彼らは異言を語ったり、預言をしたりした。*(ἐλάλουν τε φάσας καὶ ἐπροφητεύον)*」とある。この並行している、「異言」と賛美、「異言」と預言との関係をそれぞれ、どのように理解すればよいのか。即ち、二つの異なる行為を交互にしたという意味であるのか、「異言」の内容を賛美あるいは預言と説明しているのか、という問題である。一〇章の場合には、「異言」で賛美することも考えられるので<sup>(12)</sup>、どちらにも理解できる。しかし、一九章の場

合には、通常、「異言」と預言とは明確に区別されるものなので<sup>114</sup>、新改訳のように、二つの異なる行為ととるのが適切と思われる。いずれにしても、一〇章、一九章の「異言」への言及には、「異言」と賛美、「異言」と預言との類似性が示唆されている。

使徒の働きには、この一〇章、一九章以外には「異言」への言及が見出せない。しかし、二章のペンテコステの出来事を見落としてはならないであろう。ペンテコステの聖霊降臨の際に、弟子たち「みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくだるとおりに、他国のことばで話した」（ἐκλήθησαν πάντες ψευκτῶν ἁγίων καὶ ἠγόρευον ἑαυτοὺς ἐπέλαλιν γλώσσας καθῆς τὸ πνεῦμα ἐδίδον ἀποφθέγγεσθαι αὐτοῖς。四節）<sup>115</sup>。この記述を、どのように理解するべきかは、「異言」理解との関連で大きな問題となる。具体的には、二つの事柄に要約できる。一つは、二章のペンテコステの記述の史実性であり、もう一つは、神学上の事柄、つまり一回限りの出来事であるペンテコステと賜物との関係である。先ず、史実性の問題に取り組んでみる。

ほとんどの批評的な立場の学者たちは二章のペンテコステの記述の史実性に疑問を投げかけており<sup>116</sup>、「異言」について論じる際に二章の記述を無視するのが普通である<sup>117</sup>。二章の記述の史実性を否定的に見る論拠を、いくつか挙げる事ができる。先ず第一に、ペンテコステの出来事は、使徒の働き二章以外に、新約聖書や他の初期キリスト教文書では全く言及されていない。キリストの復活に言及していない初期キリスト教文書は皆無と言っていい程であるのに、ペンテコステの出来事への言及は使徒の働き二章が唯一と言ってよい<sup>118</sup>。確かに、ルカ福音書では復活したイエスは、御父の約束を受けるためにエルサレムに留まるように、昇天前に弟子たちに命じている（二四・四九、使徒の働き一・四参照）が、他の福音書を読む限りでは、ペンテコステの日まで弟子達がエルサレムに留まっていたとは思えない。しかも、ヨハネ福音書によると、復活の日のうちに既に「聖霊降臨」が起こっている<sup>119</sup>。しかも、

ルカが描く「異言」は外国語であって、「解き明かし」なして理解できるものである。パウロも含め、他の「異言」に関する記述と根本的に異なっている<sup>120</sup>。

更に問題となるのは、使徒の働きの記述そのものである。四・三一には、「彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。」と、二度めの「聖霊降臨」と「異言」の記述がある<sup>121</sup>。その上、二章の記述そのものも決して歴史的に正しいものとは到底、考えられない。例えば、九節十節には、弟子達が語るのを聞いた離散のユダヤ人と改宗者たちの出身地が列挙されているが、これらの離散のユダヤ人及び改宗者たちは、現地の言葉をほとんど知らず、実際には当時の国際語であるアラム語あるいはギリシヤ語、または両方を話していたと思われる<sup>122</sup>。また、「大ぜいの人々（ὁ πλῆθος）」は集まって来て、「自分の国のことばで弟子たちが話すのを聞いて、驚きあきれてしまった。」と六節に記され、八節から一一節までの自分たちの説明の後に、一三節になると、他の者達（ἑτέροις）が、弟子たちは「ぶどう酒に酔っている。」と嘲っていたとあり、ぶどう酒に酔っている、と嘲る反応には、理解できない「言葉」が語られていたことが明らかに示唆されており、六節から一二節までの記述と矛盾する<sup>123</sup>。しかも、出身地の一覧表の中に、何と「ユダヤ」まで挙げられている（九節）<sup>124</sup>。

以上の理由から、しばしばペンテコステの出来事の記述の歴史的信憑性は拒絶される。そして、創世記一章のバベルの塔の出来事の結果、多くの言語に分裂、混乱してしまった呪いに対して、福音が多くの言語で語られる祝福として描かれているとも理解される<sup>125</sup>。他方、ペンテコステの祭りとしナイ山での律法授与とを結び付けるユダヤ教の伝承がある<sup>126</sup>。また、ヤハウエは律法をあらゆる民族に各々の言葉、即ち七〇の言語で提供したが、イスラエルの民以外は拒絶してしまったとの伝承もある<sup>127</sup>。ルカは、このような伝承を踏まえて、象徴的な意味を確立するため

にペンテコステの記述を創作したとされる<sup>10)</sup>。

以上のような理解を、ほとんどの批評的な立場の学者、注解者たちが、多かれ少なかれ受け入れている。しかし、このような理解には、大いに問題があると言わなければならない。先ず第一に、このような理解の背後には歴史と神学とを明確に二分し、対立的に把える考え方が根強くある。ルカが、ペンテコステの出来事をバベルの呪いを祝福に変えるものとみなしたり、シナイ山でヤハウエが律法を七〇の言語であらゆる民族に提供しようとしたとの伝承との類似性を見出したり<sup>11)</sup>していたとしても、ルカの記述の史実性を否定する根拠とは必ずしも言えない<sup>12)</sup>。福音書についても言えることであるが、各新約聖書記者が各々の神学を持ち、福音書を、あるいは使徒の働きを記したからといって、歴史をないがしろにした、とは断定しがたい。歴史的に実際に起こった出来事に神学的な意義を見出し、それを引き出すことによって、歴史と神学とを両立させることは決して不可能なこととは思えない。むしろ、そのような視点こそが自然であると思われる。しかも、使徒の働きの記者が「すべてのことを初めから綿密に調べたり (παρηκολοθησάντων ἀναθεύειν πάντων ἀκριβώς)」<sup>13)</sup>、「正確な事実であることを (τῆν ἀσφάλειαν)」<sup>14)</sup>テオピロに書いて、教えようとしているのであれば<sup>15)</sup>、なおのこと、象徴的な意味や神学的意図が読み取れることを根拠に、歴史的に怪しいとするのは、公平な評価とは考えにくい。

更に、個々に指摘されている問題点にしても、決して、説明や解決が不可能なことではない。ペンテコステの聖霊降臨の伝承は、確かに新約聖書中で使徒の働き以外にはない。しかも、イエスの復活後、弟子達がエルサレムに留まった記録も福音書などには見あたらない。マタイ福音書によると、復活の主に弟子達が見えるのは、ガリラヤの山で、である(マタイ福音書二八・一六)。また、ヨハネ福音書でも、弟子達は、ガリラヤに帰って、漁を再び始めた時、「もう一度」復活の主に出会っている(ヨハネ福音書二二章)。しかし、この種の、沈黙からの議論には

注意が必要である。即ち、他に伝承がなく、使徒の働きにしか記されていないから、ルカが神学的な意図を表現する一つの枠組として創作した、という結論を導き出す必然性は必ずしもない。興味深いことに、ルカ福音書二四章には、イエスは復活した、その日の晩(あるいは夜中か?)に昇天したかのように記されている。ところが、ルカ福音書の続編ともいえるべき使徒の働きでは、復活後(あるいは受難後)四十日たってから昇天したと明記されている(一・二三)。ルカが使徒の働きを執筆するにあたって、福音書を書いた時の事実<sup>16)</sup>に忠実な姿勢を急に捨て、様々な神学的な意図から、たとい既に福音書に書いたことと矛盾するとしても、創作に励んだとは考え難い<sup>17)</sup>。むしろ、福音書を締めくくるにあたって、ルカが重要と思った出来事にのみ注目して、適切にまとめあげた結果という風に理解するべきではないだろうか。同一人物の記述でさえ、このようなことが起こるのであるから、他の福音書に、「四十日」や、弟子達のエルサレム滞在などへの言及がないこと自体は、必ずしもペンテコステのエルサレムでの聖霊降臨の事実の否定の根拠とはならない。使徒の働きの記述にしても、弟子達が、イエスのエルサレム入城からペンテコステまでずっと、エルサレムに滞在していたとは主張していない。せいぜい言えることは、イエスの昇天からペンテコステまで滞在していた、ということであろう。

ガリラヤの山で復活の主に出会い(マタイ福音書二八・一六—二〇)、そして、ガリラヤで漁をしていて復活の主に出会った弟子達(ヨハネ福音書二二章)が、エルサレムに再び行き、その郊外で復活の主が天に帰るのを見送り、ペンテコステまでの間エルサレムに留まり続けたのかもしれない。また、ヨハネ福音書二〇章で、復活の主が弟子達に「息を吹きかけて」、「聖霊を受けなさい。」<sup>18)</sup>と言っている(二二節)が、ペンテコステの聖霊降臨を先取りしているとしても、あくまでも予備的なものとして理解できるのではないだろうか。ペンテコステを待たなければ、聖霊が主権的に自由に力強く働くことはなかったが、予め指し示しておくための出来事と十分に考えられる。結局は、

ルカの記述を、どこまで信頼に足ると判断するかにかかってくる<sup>88</sup>。以上のような考察より、ペンテコステの聖霊降臨の出来事を容易には否定し切れないと思われる。

更に、使徒の働き二章の記述そのものに目を向きたい。確かに、詳細に見ていくならば、一貫していなかったり、不正確と思われる記述の存在を必ずしも否定はできない<sup>89</sup>。例えば、一二節で「人々はみな、驚き惑って、…… (ἐξίσταυτο ὁ δὲ λαὸς καὶ διαπόρου, …)」と記されているが、次の節は「しかし、ほかに……：たちもいた。(ἐπεὶ οὖν …)」となっている。また、ユダヤ人たちの出身地の一覧表に「ユダヤ(九節)」という地名が出て来るのも、奇妙と言えば、奇妙である。もっと現実的な疑問としては、弟子たちが様々な国語で神の偉大な御業を語ったとしても、その場に居合わせた人たちは、それぞれが異なった所から来ていたとしても、弟子たちの話の内容を、はっきりと聞き分けることができたのであろうか。むしろ、様々な国語が混じり合ってしまったら、彼らが何か意味のあることを語っているようには聞こえなかったのではないだろうか。以上のような、理解の難しさや問題点がルカの記述にあることは認めなければならない。しかし、ルカが描こうとした状況を想像してみるには必ずしも不可能なことではない、と筆者は考える。以下に、ルカが描写している状況を復元してみようと思う。

ペンテコステの日に、皆が一つ所に集まっていた。一章からの流れで二章一節を読むと、「みな (πάντες)」とは、弟子たち皆のこと、数にして約百二十名であったと思われる(一：一五)。そして、集まっていた場所は、「泊まっている屋上の間 (τὸ ἑσπέρου … οὐ ἴσαν κατακλινοῦντες)」(一：一二)であったと思われる。そして、突然、強い風が吹いたような音が天からし、家全体に響き渡った<sup>90</sup>。この聴覚上の現象に視覚上の現象が加わってくる。炎のような分かれた舌 (διγλωσσομεναι γλώσσαι ὁμοί πῦρος) が現われ、各人の上に留った。そして、皆が聖霊に満たされ、御霊が話させる通りに、他の言語で (ἐτέραις γλώσσαις) 話し始めた。

この時点で、弟子たちは屋外に出始めたのであろうか。そして、最初の「風のような音」あるいは「弟子たちの叫び声<sup>91</sup>」を聞いて大勢の人々 (τὸ πλῆθος) が集まって来た。そして、各人の国のことばで<sup>92</sup>弟子たちが語っているのを聞いて、彼らは驚く。彼らの出身地は九節から一一節に列挙されているように広範囲に渡っている。先ず、この七節から一一節にかけて大勢の人々に一人称複数で語らせているのはルカ(あるいは彼の用いた資料)の文体ということと理解できようであろう。「語り手」という形で叙述するよりも、生き生きとした印象を読者に与える効果が期待できる。文字通りに、誰かが、こう語ったととる必然性はないと思われる。

また、「私たちの」出身地の一覧表についても、基本的にはユダヤ人が当時、比較的多く居住していた地域であり、疑ってかかる必要は余りないであろう。さて、「ユダヤ」に触れるならば、確かに「ユダヤ」が言及されるのは奇妙かもしれないが、前後の地名から考えるならば、広義に解し、「シリヤ」という表現とはほぼ同義と考えてよいのもかもしれない<sup>93</sup>。

何よりも、ルカの記述で一番問題となるのは、一二節の「人々みな (πάντες)」と一三節の「ほかに (ἐπεὶ οὖν)」との対比には多少、目をつぶってみても<sup>94</sup>、ある人々には自分たちの言語と理解できたものが、他の人々には、酔っぱらいのたわごとと聞こえたのは、どうしてであろうか。この一二節の ἐπεὶ は、外国の言葉を知らない、エルサレムのユダヤ人であったのか<sup>95</sup>。それとも、ペンテコステに起こった奇跡は、外国語を語る奇跡ではなく、聞く側に起こった奇跡であった<sup>96</sup>のか。どちらも、ルカの記述の仕方即ち理解とは言い難い。ルカ自身は、ただ単に ἐπεὶ と記しているだけで、エルサレムのユダヤ人であるとは明記していない。また、聖霊に満たされたのは、弟子たちであり、聞く側の大勢の人々ではない。しかも、 γλώσσα のみならず、 διάλεκτος (六節、八節) という用語も使っているので、弟子たちが言語を語っていたことは否定し難い。

とすると、なぜ、ある人々には弟子たちの言葉を理解することができなくて、酔っぱらいのたわごとにしかなかなかつたのか。不思議なことと言えば、不思議なことかもしれないが、意外と容易に説明することができるのではないだろうか。即ち、百人以上の弟子たちが、様々な言語で「神の大きなみわざ」を語っていた訳で、そこには大した秩序があったとは思われない。ある時には、パルテヤ人の言葉で、他の時には、メソポタミヤの言葉で、と皆が一斉に語っていたように記されていない。また、パルテヤ人の所には、パルテヤ人の言葉で語る者が近付き、メソポタミヤからの人の所には、メソポタミヤの言葉を語る者が行ったとも思えない。むしろ、百人以上の弟子たちが、いわば無秩序に、ある者はパルテヤ人の言葉で、他の者はメソポタミヤの言葉で語っていたと思われる。すると、そのような喧噪の中では、確かに自分の国の言葉を聞き分けることのできる者たちがいる一方、他方では騒々しさの只中で、ただ騒いでいるとしか見ない人々がいても当然ではないだろうか。従って、酔っぱらっているだけ、と思った人々の国の言葉を弟子たちが語っていないなかった、というよりも、その時の状況のために、語られていたにも拘わらず、聞き分けられなかった、と十分理解できる。もし、そうならば、ルカの記述こそ、出来事に即して、学者達の想像する出来事の方が非現実的で理想的と言えるかもしれない。

以上、使徒の働き二章のペンテコステの出来事、即ち、弟子たちが聖霊に満たされて外国語を語った、ということの史実性は容易には否定できないことを論じてきた。勿論、私たちはルカの視点を通して、ペンテコステの出来事を見ているので、ルカがペンテコステの出来事を完全に誤解していたならば、それまでである。しかし、実際問題としても、ルカは誤解し、私たちはより正しく理解できる、とは主張できない。ルカの記述や理解以外に、私たちは一体、何を根拠にすればよいのであろうか。むしろ、ルカの理解や記述を否定し去る程の権限は私たちにはない、と謙虚に認めるべきである<sup>55</sup>。

もし、このように、使徒の働き二章の記述の史実性を認めるならば、聖霊降臨の時に弟子たちが「他国のことば」で語ったことと、一〇章、一九章で言及されている「異言」とを同一視する必要があると思われる。即ち、一〇章四六節の *καθ' ἑαυτοῦ γλώσσαις*、一九章六節の *ἐλάλουν … γλώσσαις* は、二章四節の *καθεὶν ἐτάραξ γλώσσαις*<sup>56</sup> の省略表現と理解される<sup>57</sup>。

以上の、使徒の働きにおける「異言」についてまとめてみると、次の三点に要約できる。

- (一) ルカは、明らかに「異言」を言語の一種であると理解していた。
  - (二) しかし、「異言」は聖霊によるものであり、超自然的なものとみなしていた。
  - (三) また、教会が宣教の業によって拡大していく決定的な局面で、ルカは「異言」に言及している。
- 「異言」に言及されていない時には「異言」が語られなかったと結論するのは性急と思われるが、少なくともルカは、そのような重要な局面での神の介入を特徴付ける現象、と理解していたと言える。もし、このような理解が正しいとするならば、罪人がイエスを信じて救われ、聖霊がその人に臨む時には、必ず「異言」を語る<sup>58</sup>、との見解には、明らかな根拠がない<sup>59</sup>ことになる。他方、パウロの言う、繰り返し用いることのできる「御霊の賜物」としての「異言」と、ルカのいう一回限りのものである「異言」とは完全に同じものとは言えなくなる<sup>60</sup>。

## 二、コリント教会での「異言」

次に、パウロのコリント教会への手紙での「異言」に関する言及から、コリント教会での「異言」が、どのような現象であったかを釈義的にアプローチしてみる。パウロは、コリント人への手紙第Iの後半部分で、コリント教

会からの質問に答えている。七章一節には、「さて、あなたがたの手紙に書いてあったことについてですが(περὶ τοῦ ἐπαλάττου) …」とある。そして、先ず、異性に関することや結婚についてパウロは教え(七章)、更に、偶像

にささげた肉についての見解を論じている(八―十章)<sup>50</sup>。そして、一章で礼拝に関して、パウロは述べ、二章から一四章にかけて、「御霊の賜物について(περὶ τῶν πνευματικῶν)」(一一:一)説明している。ところが、パウロの関心事は、賜物全般のことというよりも、「異言」に関することと思われる。実に頻繁に、この三つの章で「異言」が言及されている<sup>51</sup>。これに対し、パウロが他の箇所でも賜物に言及している時には「異言」には全く触れていないこと、更には、パウロ書簡で、「異言」に言及しているのが、この三つの章に限られていることに着目すれば、コリント教会の特殊事情が反映していると考えざるをえない。

パウロが、これほどまでに「異言」問題にこだわる、コリント教会の特殊事情とは一体、何であつたのだろうか。勿論、今の私たちにはすべてが明らかになる訳ではないが、可能な限り推察してみたい。パウロの議論は基本的に「異言」に対して消極的ではありながら、「異言」そのものを否定してはいない<sup>52</sup>。このことから、当時、コリントの教会では過度に「異言」を重視し、強調する傾向、もしくは人々がいたと考えられる。そして、そういう人たちは、自分たちが「預言者」であるとか、「霊的な人<sup>53</sup>」であると自認していたらしい。また、彼らの「異言」、および、それに伴う「霊的な行為」で、コリント教会の礼拝秩序が乱れていたことは想像にかたくない<sup>54</sup>。中には、御霊に促されて(と主張して)、キリストを呪う者さえ現われたのかもしれない(コリント第一二二:三)<sup>55</sup>。あるいは、この「霊的な人」たちの存在が、コリント教会の分裂傾向<sup>56</sup>を助長していたのかもしれない。

このようなコリント教会の状況に対して、パウロは御霊の賜物の多様性と調和とを強調している<sup>57</sup>。体の比喩等を用いて、明確に、多種多様な賜物の存在を認め、しかも、その賜物間の優劣を否定している。そして、調和を強調している。いわば、「異言」の賜物を相対化している<sup>58</sup>。更に、(いわゆる「御霊の賜物」ではないが<sup>59</sup>)「さらにまさる道」として、愛を紹介している。このあたりから、明らかに、パウロが意識していたのは、「異言」を絶対化している人々であつたことが伺える。そして、一四章では、更に具体的に、預言の賜物と比較しながら、「異言」の賜物に関して注意しなければならないことを指摘している<sup>60</sup>。パウロが、ここで預言と「異言」とを比較している、ということとは、両者が類似していることを示唆している。両者の決定的な違いは、預言は誰もが聞けば分かるが、「異言」は分からない、ということに他ならない。その結果、預言は教会の徳を高めるが、「異言」は高めない。「解き明かす者」がいないと、「異言」は教会の徳を高めない点が一つの大きな問題として指摘されている。従って、「異言」を有効に生かすためには、「解き明かし」の賜物が不可欠ということになる。そうでないと、未信者など一般人に、つまずきを与えてしまうだけである。そういう外部の人のことも考え、教会の礼拝の秩序も保つようにパウロは指導している。つまり、「解き明かし」を交互に入れ、しかも、順番に一人ずつ「異言」を語るように勧めている。秩序に関しては、預言にも同様の危険があつたらしい。

ところで、以上のような問題を抱えてコリント教会の「異言」とは、どのようなものであつたのだろうか。残念なことには、また当然なことには、パウロは「異言」が、どのようなものか、と説明したり、定義したりしていない<sup>61</sup>。コリント教会の人たちは、当然、「異言」が何であるかを知っていた。少なくとも、コリント教会の「異言」がどのようなものかは知っていて当然である。従って、パウロは「異言」という現象を改めて説明する必要がなかった。とはいえ、私たちには必ずしも自明とは言えないので、以下に可能な限り、探ってみたいと思う。

先ず、「異言」は「御霊の賜物」の一つであつた。パウロは、このこと自体は否定していない<sup>62</sup>。次に、「異言」は預言と似ているが、預言とは異なり、誰かが(「異言」を語る本人でもよい)「異言」を解き明かさないと、教会の